

福井県埋蔵文化財調査報告 第169集

犬山遺跡

— 一般国道476号道路改良事業に伴う調査 —

2018

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

犬山遺跡が所在する大野市は、福井県東部の奥越地方に位置し、日本百名山にも選定された荒島岳をはじめとする高い峰々に囲まれています。山々から端を発した清流が流れる自然豊かな都市には、大野城がそびえ、眼下には城下町が広がり、歴史が息づく街です。

犬山遺跡では、過去に調査が行われておますが、今回の調査でも縄文時代から古墳時代の痕跡を確認することができました。小規模な調査でしたが、乾側地区における原始・古代の土地利用の一端を知ることができました。

出土した土器には、東海地方との交流を物語る資料も含んでおり、大野盆地に居住していた当時の人々が遠方の地域と積極的に交流していた姿が想起できます。現在の私達が想像する以上に、人やモノが動いていたのでしょう。

近年、大野市では中部縦貫自動車道や圃場整備事業に伴って大規模な発掘調査が増加しており、文献ではわからない古代の様子が、考古学資料によって鮮明になりつつあります。

今回の調査成果が、文化財に対する理解を深め、各方面で活用されれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大なご支援とご協力を賜りました。深く感謝申し上げます。

平成 30 年 7 月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所 長 赤 澤 徳 明

例　　言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター(以下、県埋文と略)が一般国道476号道路改良事業に伴い、平成28年度に実施した犬山遺跡(福井県大野市犬山所在)の発掘調査報告書である。
- 2 犬山遺跡の調査は、福井県奥越土木事務所の依頼を受けて県埋文が実施し、鈴木篤英、三原翔吾が担当した。
- 3 発掘調査は、平成28年4月1日から平成28年6月30日まで実施した。遺物の整理作業は、整理・普及グループが担当し、平成29年4月1日から平成30年7月20日まで実施した。
- 4 本書の編集は三原が行い、鈴木、山本孝一が分担して執筆した。執筆の分担は以下の通りである。
三原…第1～3・5章　鈴木…第4章第1節2・第2節　山本…第4章第1節1
- 5 犬山遺跡に関するこれまでの成果発表のうち、本書と齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものとする。
- 6 遺構・遺物撮影、第11～13図、第3・4表は鈴木が作成し、第9・10図、第2表は山本が作成した。上記以外の挿図は、三原が作成した。
- 7 本書に掲載した遺構図は、株式会社中央測量設計株式会社に委託・作成したものを一部改変して用いた。
- 8 図版、挿図、表中の番号は符号する。写真的縮尺は不同である。
- 9 本書における水平レベルの表示は、海拔高(m)を示し、方位は座標北を用いた。また、X・Y座標値は、世界測地系第VI系に基づく。
- 10 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して県埋文に保管している。
- 11 土色及び遺物の色調は、『新版標準土色帳(1999年度版)』に基づき判別した。
- 12 遺構の表記については、基本的に遺物を含む遺構に限定し、土坑はSK、溝はSD、遺構断面地点はSの略記号を用いた。また、遺構や包含層から遺物が単体で出土した地点にはXの略記号を用いた。
- 13 発掘調査ならびに本書の作成にあたり、下記の機関、方々からの指導・協力を得た。

石川敦子　犬山区長　大野市教育委員会　奥越土木事務所　勝山市教育委員会　工藤俊樹　藤本康司

(敬称略五十音順)

- 14 発掘調査には、地元の方々の協力を得た。遺物整理作業は、県埋文の整理作業員が実施した。

目 次

	頁
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 地理的・歴史的環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 遺構	7
第1節 調査の概要	7
第2節 遺構	8
1. 土坑 2. 溝 3. 河川	
第4章 遺物	11
第1節 土器	11
1. 繩文土器 2. 弥生～古墳時代の土器	
第2節 石器	15
第5章 まとめ	19

写真図版目次

図版第1 遺構

- (1) 遺跡遠景 (北西から)
- (2) 遺跡近景 (南東から)

図版第2 遺構

- (1) SK1 (南から)
- (2) SK2 (北から)
- (3) SD6 遺物出土状況 (南から)
- (4) 河川1 (南から)

図版第3 遺構

- (1) 河川1 遺物出土状況 土器群1 (北西から)
- (2) 河川1 遺物出土状況 土器群2 (南西から)
- (3) 河川1 内 X003 (打製石斧6)、X004 (磨石14) (西から)
- (4) 河川1 内 X006、007 (石皿19) (東から)
- (5) 河川2 (南から)

図版第4 遺構

- (1) 河川2内 X013 (縄文土器13) (西から)
- (2) 河川2内 X008 (打製石斧7) (東から)
- (3) 河川2内 X012 (砥石9) (東から)
- (4) 包含層4層内 X015 (縄文土器8) (西から)
- (5) 包含層4層除去後 (東から)

図版第5 遺物 縄文土器

図版第6 遺物 弥生～古墳時代の土器 石器

挿図目次

	頁
第1図 調査区位置図	1
第2図 調査区グリッド配置図	2
第3図 発掘調査風景	2
第4図 遺跡周辺の地形分類図	3
第5図 周辺の主要遺跡分布図	5
第6図 調査区全体図	7
第7図 SK1・2、S2～5、SD6遺物出土状況	9
第8図 河川1遺物出土状況、S1	10
第9図 縄文土器	13
第10図 縄文土器	14
第11図 弥生～古墳時代の土器	15
第12図 打製石斧、砥石、磨石	16
第13図 磨石、石皿	17

表目次

第1表 遺構一覧表	8
第2表 縄文土器出土地点一覧表	12
第3表 弥生～古墳時代の土器観察表	18
第4表 石器観察表	18

第1章 調査の経緯

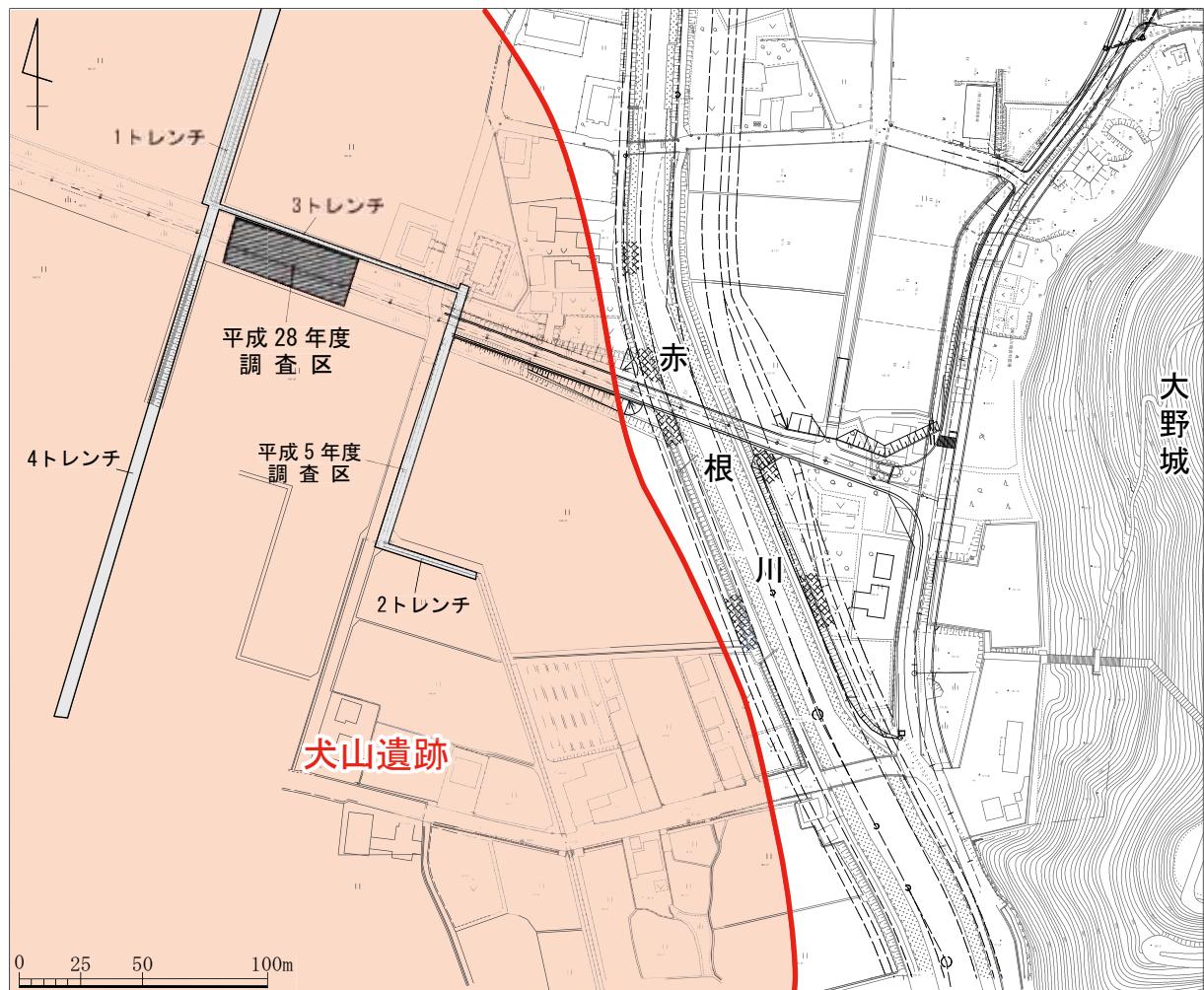
第1節 調査に至る経緯(第1・2図)

1. 調査の経緯

近年、奥越地域では中部縦貫自動車道の部分開通に加え、平成30年度に福井県で開催される国体の競技会場が大野市に設けられることが決定し、交通量の増加と大型車の乗り入れが問題として想定されてきた。そのため、渋滞緩和とアクセスの向上を目的に、大野市内では継続的に道路改修工事が行われている。今回の「一般国道476号道路改良事業」もその一環を成すものである。

事業地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である犬山遺跡に含まれ、平成5年度に圃場整備事業で調査を実施した経緯がある(第1図)。今回の事業地内にも遺跡が存在する可能性が高く、遺跡の内容・密度を把握するため、県埋文は平成18年6月6日に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、弥生時代の遺構・遺物を確認し、工事の掘削深度を勘案すると遺跡の破壊は避けられないと判断したため、事業着手前に南北20m、東西50mの範囲に限って記録保存のための発掘調査が必要である旨を奥越土木事務所に回答した。調査対象面積は約1,000m²である。



第1図 調査区位置図 (縮尺 1/3,000)

2. 調査の方法

調査区には、世界測地系に沿ったグリッドを設定する予定であったが、諸般の事情により 10m × 10m の任意グリッドを設定せざるを得なかった。

グリッドには、遺構実測や遺物の取上げの基準として、西から東へ A ~ F、北から南へ 1 ~ 5 の番号を付した(第2図)。

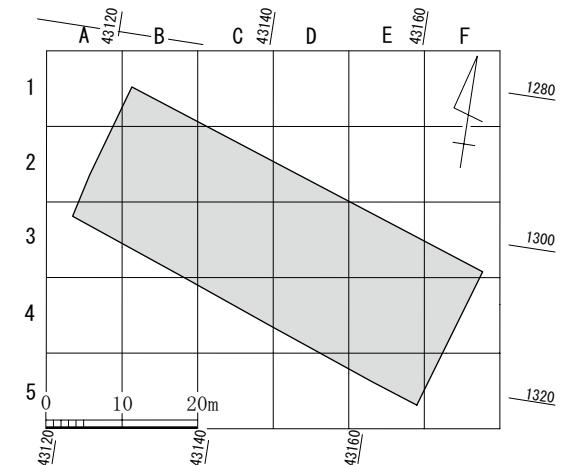
記録方法については、1/50 縮尺で調査区全体図を作成し、1/10 または 1/20 で遺物出土状況図や遺構断面図を作成した。

第2節 調査の経過

発掘調査の経過は以下の通りである。

平成28年

3月23日 表土除去開始。25日まで。
4月5日 プレハブ搬入、設置。基本測量。
4月7日 作業開始。器材設置。
4月12日 トレンチ設定、掘削開始。
4月13日 調査区東側掘削開始。溝、小穴を検出。弥生土器・土師器が出土。
4月15日 1/50全体図作成。SD1掘削開始。
E3・4 グリッド遺構精査。
4月18日 河川1掘削開始。
4月19日 SD6掘削開始。
4月22日 下層の包含層から縄文土器が出土。



第2図 調査区グリッド配置図 (縮尺 1/1,000)

4月26日 SD6 遺物出土状況写真撮影。
5月9日 河川2掘削開始。
5月13日 下層の包含層掘削開始。縄文土器出土。土器群1写真撮影、遺物取上げ。
5月20日 河川1掘削完了。
6月10日 空撮実施。午後、高所作業車にて全景撮影。
6月24日 下層包含層掘削完了。写真撮影。調査器材清掃。
6月28日 発掘器材撤収準備。
6月30日 調査終了。



第3図 発掘調査風景

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境(第4図)

本遺跡の所在する大野市は、嶺北地方の東部に位置する。北は勝山市、西は福井市、今立郡池田町と接し、石川・岐阜両県と山を隔てて接する山間の都市である。県内では最も面積が大きく、県総面積の5分の1を占める。市東部には、県の主要河川の1つである九頭龍川が北流し、勝山市から福井市、坂井市を経て、日本海へと通ずる。九頭龍川上流域には、大野・勝山盆地が形成されている。

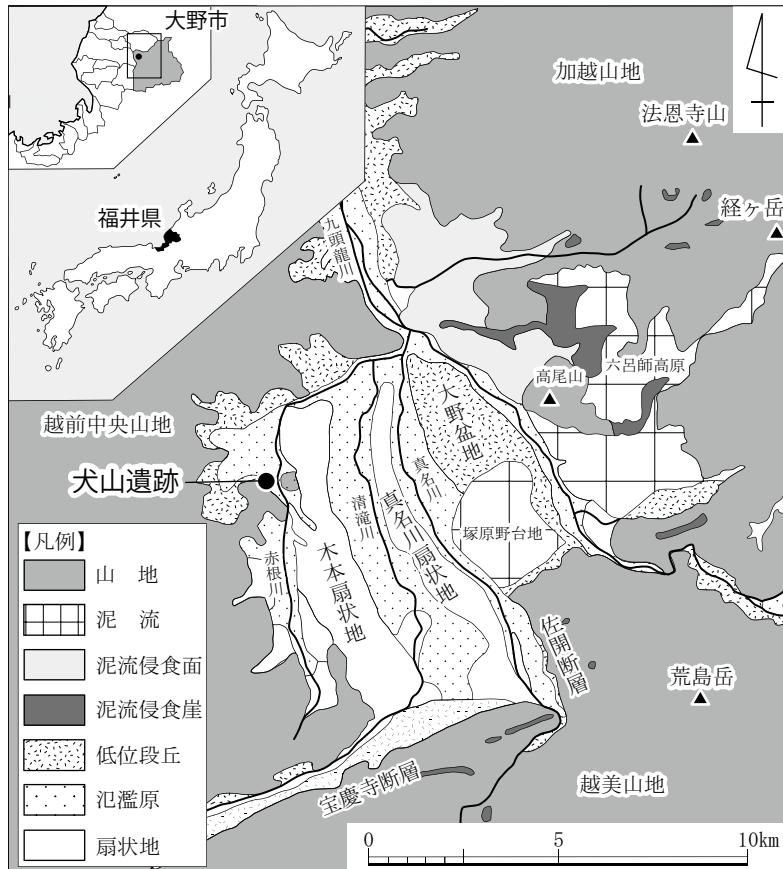
市内には、大小さまざまな断層が見られる。活断層としては、盆地南限に宝慶寺断層、荒島岳と大野盆地を画する佐開断層、岐阜県から池田町まで伸びる温見断層などが挙げられる。大野盆地は、これらの断層に起因した凹地に河川堆積物と泥流が堆積した堆積盆地と考えられている。

本市の地形は、大野盆地を中心にして、南・東方を占める荒島岳などの諸峰が連なる越美山地、西方を占める標高700m程の越前中央山地からなっている。盆地内を大きく分けると、西側の真名川・清滝川・赤根川などの北流する河川によって形成された扇状地とその氾濫原、東側の真名川と九頭龍川に挟まれた低位段丘に分類できる。さらに扇状地は、清滝川によって形成された木本扇状地と真名川による真名川扇状地に分けられ、これらの扇状地は扇形をなさず、河川に沿って舌状をなす。また、木本扇状地には、現在の市街地中心部が広がり、扇状地を伝う伏流水が市街地各所で湧出し、名水百選として選定された本願寺清水をはじめとする豊富な水資源を有している。周知の遺跡の多くは、自然堤防上や低位段丘面に占地して

いる。

盆地東側には経ヶ岳から噴出した火碎流などを含む泥流で構成する火山灰性台地が広がる。これは、県内唯一の地形であり、表層地形は盆地東部と西部で大きく異なっている。

盆地南東部に位置する塚原野台地は、火山灰性台地であり、面積は25.6km²に及ぶ。この台地は、泥流地形としては国内有数の規模であり、盆地内には泥流丘(通称:流れ山)が形成され、経ヶ岳から噴出した巨石が畑地に散見され、噴火の激しさを伝えている。戦後開拓パイロット事業によりこの地形の多くは失われてしまった。



第4図 遺跡周辺の地形分類図 (縮尺 1/200,000)

第2節 歴史的環境(第5図)

大野市域では、約20年前から圃場整備や道路改良工事、中部縦貫自動車道建設に伴い、大規模に発掘調査が行われ、赤根川や真名川流域を中心に調査事例が増加している。ただ、市街地中心部は包蔵地に指定されている箇所がなく、遺跡の広がりが不明な点も多い。本節では、今回の調査と関連する大野盆地の主要な遺跡を取り上げ、その概要を述べる。

1. 縄文時代

縄境遺跡(第5図24)、右近次郎西川遺跡(第5図28)などで晩期を中心に遺物を確認しているが(文9・16)、土器がまとまった量出土している遺跡として右近次郎遺跡(第5図27)、下黒谷遺跡(第5図31)が挙げられる。

右近次郎遺跡では、中期から後期の石囲炉または埋甕を伴う住居が13軒、土坑9基、特殊遺構2基などが確認され、遺物包含層から出土した土器を含めると前期前葉から後期前葉までの長期間の土器群が出土している(文3・4)。土器以外に、打製石斧、石鎌、磨石、石錘などの石器類も確認されている。

下黒谷遺跡では、石囲炉をもつ中期の住居2軒、土器捨て場などが検出されており、包含層からは中期後半から晩期後半の土器が出土している。両遺跡は赤根川流域に所在する遺跡であり、出土土器の年代から併存することが明らかになっている(文12)。

2. 弥生時代

前後の時代に比して多くの資料が得られており、多くの遺跡は赤根川流域に立地する。弥生時代の生活痕跡が確認され始めるのは、下黒谷遺跡をはじめとする中期のことであり、後期末から古墳時代初頭にかけて最も多くの遺跡が確認できる。

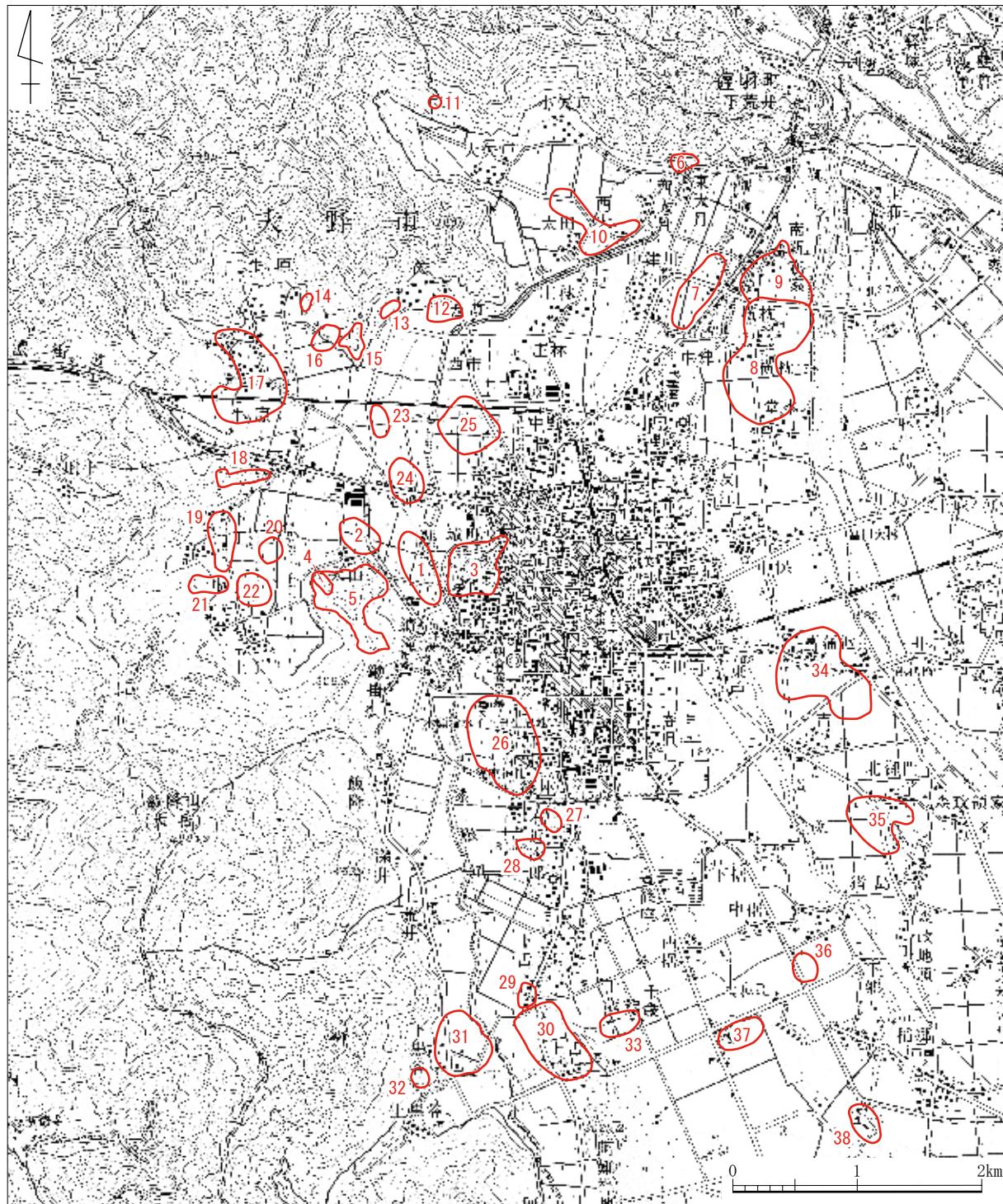
太田・小矢戸遺跡(第5図10)などの各遺跡で土器は比較的多く出土するが、出土遺構は土坑・溝・自然河川などが主体的である。ただ、後期末から古墳時代前期に属す上舌遺跡(第5図30)では、堅穴建物3軒、掘立柱建物4棟を検出しており(文18)、大野市域で集落域を確認できる数少ない事例である。また、下黒谷遺跡では、中期の土器棺と後期の方形周溝墓(状遺構)が確認されており、墓域が広がる遺跡として注目できる。

その他に特筆できる遺跡として、中丁遺跡(第5図22)がある(文17)。検出した土坑から銅鐸の形状や装飾を模した長頸壺を含む多量の土器が出土しており、良好な資料群が得られている。また、右近次郎西川遺跡では、大野盆地で唯一の玉作り関連資料が出土している(文16)。施溝分割が見られない弥生時代後期の特徴を有し、工房と考えられる建物1軒を検出している。玉作りの石材は、大半が緑色凝灰岩を用いているが、水晶原石やガラス小玉も出土している。なお、丘陵尾根上に、この時期の墳丘墓も確認されているが、次項でまとめて述べる。

3. 古墳時代

盆地西部の丘陵尾根上を中心に、犬山古墳群(第5図4)や東稻場古墳群(第5図14)、山ヶ鼻古墳群(第5図15)など約140基の古墳や墳丘墓が確認されている。一方で、大矢戸古墳(第5図11)など横穴式石室を有する後期古墳が段丘上に位置し、立地を異にする古墳も存在する。発掘調査が実施されている古墳は少ないため不明な点も多いが、方墳(墳丘墓)が主体であると考えられており、前方後円墳や円墳は少数である(文1)。

山ヶ鼻古墳群は、盆地北西部の丘陵尾根上に立地し、前方後円墳1基(6号墳)、円墳5基(8・9・11・



番号	県番号	遺跡名	番号	県番号	遺跡名	番号	県番号	遺跡名	番号	県番号	遺跡名
1	05050	犬山遺跡	11	05001	大矢戸古墳	21	05044	丁古墳群	31	05075	下黒谷遺跡
2	05048	犬山村下遺跡	12	05010	矢前田遺跡	22	05046	中丁遺跡	32	05076	下黒谷経塚
3	05051	大野城	13	05012	矢西畠遺跡	23	05036	下田遺跡	33	05082	千歳遺跡
4	05052	犬山古墳群	14	05015	東稻場古墳群	24	05049	繩境遺跡	34	05090	菖蒲池遺跡
5	05053	戌山城跡	15	05013	山ヶ鼻古墳群	25	05039	中野遺跡	35	05096	北御門城山遺跡
6	05022	磐座神社遺跡	16	05014	六反田遺跡	26	05063	新庄遺跡	36	05110	中据遺跡
7	05025	中津川黒之上遺跡	17	05018	尾永見遺跡	27	05068	右近次郎遺跡	37	05107	榎遺跡
8	05086	横枕遺跡	18	05033	花山古墳群	28	05067	右近次郎西川遺跡	38	05120	据遺跡
9	05026	南新在家松本遺跡	19	05043	下丁遺跡	29	05074	下舌遺跡			
10	05004	太田・小矢戸遺跡	20	05047	中丁堂明遺跡	30	05079	上舌遺跡			

第5図 周辺の主要遺跡分布図（縮尺 1/50,000）

14・15号墳)、方墳14基(1～5・7・10・12・13・16～20号墳)の総数20基からなる古墳(墳丘墓)群である。7～10・15～17号墳の計7基は未調査のまま消滅した。

4～6・20号墓の計4基で発掘調査が行われており、弥生時代中期から古墳時代中期までの墳墓が混在している。4号墓からは赤彩された流水文をもつ壺が出土しており、東海地方の影響が指摘されている。また、6号墳は、盆地内で唯一認められる古墳時代中期前葉の前方後円墳であり、埋葬施設に割竹形木棺を有し、鉄劍と鉄鎌が出土している。

集落については、弥生時代後期末から古墳時代初頭に続く集落が比較的多く確認できるが、古墳時代中期以降は新庄遺跡(第5図26)が、遺構・遺物がまとまった量確認できる唯一の事例である。新庄遺跡は正式報告がなされていないが、平成2年に発掘調査が行われ、5世紀後半から6世紀後半の掘立柱建物が20棟検出されている(文7)。出土した須恵器には、あわら市鎌谷窯跡群の製品を含んでいるとの指摘があり(文6)、須恵器流通からみた坂井平野と大野盆地の関係も注意される。

その他に、注目すべき点として、上舌遺跡で鉄鎌や鉋などの鉄製品が遺物包含層から出土し、下黒谷遺跡では銅鎌1点が確認されていることが挙げられる。

横枕遺跡(第5図8)では、古墳時代後期の堅穴建物1軒が検出され(文19)、右近次郎西川遺跡では溝や包含層から7世紀代の須恵器が出土している。中期頃からみられる遺跡数の減少は、嶺北地方全域でも言えることであり、県内で調査された遺跡としては、坂井市長屋遺跡、鯖江市西番遺跡、同杉本笹野遺跡、越前市安丸官人遺跡などに限られる。

参考文献

1. 中司照世「大野盆地の古墳時代(前篇)－北陸における地域研究1－」『若越郷土研究』第21巻第3号 福井県郷土誌懇談会 1976年
2. 大野市教育委員会『山ヶ鼻古墳群』大野市埋蔵文化財調査報告第1冊 1980年
3. 大野市教育委員会『右近次郎遺跡』大野市埋蔵文化財調査報告第2冊 1982年
4. 大野市教育委員会『右近次郎遺跡Ⅱ』大野市埋蔵文化財調査報告第3冊 1985年
5. 大野市史編さん委員会『大野市史』第8巻 地区編 1991年
6. 久保智康「越前・若狭における在地窯の出現」『北陸古代土器研究』創刊号 北陸古代土器研究 1991年
7. 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『年報』6 平成2年度 1992年
8. 大野市教育委員会『山ヶ鼻古墳群Ⅱ』大野市文化財調査報告第5冊 1993年
9. 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『尾永見遺跡 下田遺跡 繩境遺跡 犬山遺跡－県営低コスト化水田農業大区画圃場整備事業に伴う調査－』福井県埋蔵文化財調査報告第28集 1994年
10. 同上『尾永見遺跡Ⅱ－県営低コスト化水田農業大区画圃場整備事業に伴う調査－』福井県埋蔵文化財調査報告第37集 1997年
11. 佐々木伸治「11. 東稻場4号墳」『第12回発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1997年
12. 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『下黒谷遺跡－県営低コスト化水田農業大区画圃場整備事業に伴う調査－』福井県埋蔵文化財調査報告第40集 1998年
13. 佐々木伸治「8. 東稻場3・8号墳」『第13回発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1998年
14. 佐々木伸治「8. 東稻場5号墳・6号墳」『第14回発掘調査報告会資料』同上 1999年
15. 大野市史編さん委員会編『大野市史』第11巻 自然編 2001年
16. 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『右近次郎西川遺跡－右近次郎地区担い手育成基盤整備事業に伴う調査－』福井県埋蔵文化財調査報告第58集 2002年
17. 同上『中丁遺跡－担い手育成基盤整備事業に伴う調査－』福井県埋蔵文化財調査報告第64集 2004年
18. 同上『上舌遺跡－県営経営体育成基盤整備事業(圃場) 上舌・上黒谷2期地区に伴う調査－』福井県埋蔵文化財調査報告第131集 2012年
19. 同上『横枕遺跡－一般国道157号道路改良工事に伴う調査－』福井県埋蔵文化財調査報告第148集 2014年

第3章 遺構

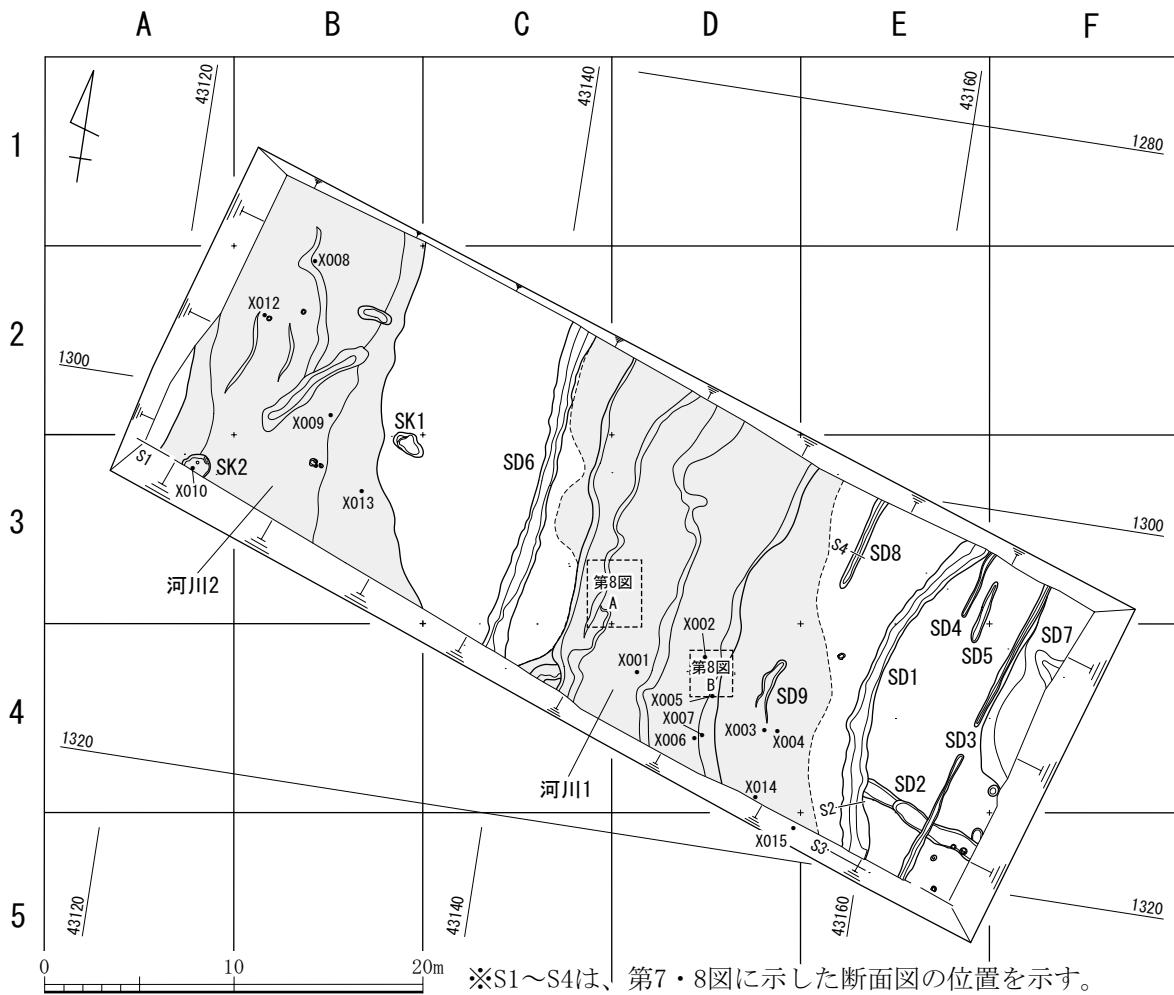
第1節 調査の概要

1. 調査の概要(第6図)

調査区周辺は水田であり、過去の圃場整備により地形は改変を受けている。今回の調査区に相当する箇所には、約0.4mの厚さで仮設道路の盛土が敷かれていた。盛土される以前は水田であり、水田耕作時に包含層の一部が削平された部分もある。

検出した遺構は、土坑2基、溝9条、河川2条であり、縄文時代後期から晩期と弥生時代中期から古墳時代前期の遺物が出土した。また、弥生時代後期末から古墳時代前期の遺構面下では、厚さ0.1～0.4mの遺物包含層を検出し、調査区南東側で縄文土器を確認した。この包含層以下の層においては、遺構は確認できなかった。出土遺物は石器・木器を含め天箱7箱分である。

調査の結果、建物等は検出できず、遺構・遺物ともに密度が希薄であったことを考慮すると、遺跡の中心域は、調査区の北東側に展開し、現在の犬山集落と重なっていると考える。



第6図 調査区全体図 (縮尺 1/400)

第2節 遺構(図版1～4 第6～9図 第1表)

1. 土坑(図版第2 第7図 第1表)

土坑は2基検出した。SK2は河川2埋没前の弥生時代後期末以前に構築されている。SK1からは出土遺物はなく時期不明だが、SK2と覆土が類似することから、SK1も同時期と判断する。

2. 溝(図版第2 第6・7図 第1表)

溝は9条検出した。SD1・6は、覆土が同一であり、底面直上に堆積していた粒子の荒い砂質土から弥生土器や土師器が小片で出土した。両遺構は、遺物の出土状況も類似し、布留系甕が出土しているため、古墳時代前期以降に埋没したものと考える。

SD2～5・7・8は、掘削深度が浅く、出土遺物に近世から現代の陶器・磁器を含んでいたため、近世から現代に属する。

3. 河川(図版第2～4 第8図 第1表)

河川は2条検出した。北西方向に貫流する自然河川である。河川1は比較的多くの縄文土器・弥生土器を含んでいたが両岸からの出土が多く、周辺から流れ込んだものと考える。出土遺物からみると同時期に存続していたと考えるが、河川1の埋没時期は、1層の上に3層が堆積することから、河川1が後出すると考える。

第1表 遺構一覧表

土坑(第7図)

位置	挿図	規模(m)			時期	遺物	特徴
		長径	短径	深さ			
遺構	写真図版	形状					
B3	第7図	1.70	1.02	0.19	①以前	—	出土遺物がないため、帰属時期は不明確。
SK1	図版第2(1)	不正楕円形					
A3	第7図	1.30	—	0.18	①以前	—	南側の一部が調査区外へ延びるため、全体形状不明。SK2上の河川2覆土中から石皿(X010、第13図18)が出土した。
SK2	図版第2(2)	(不整円形)					

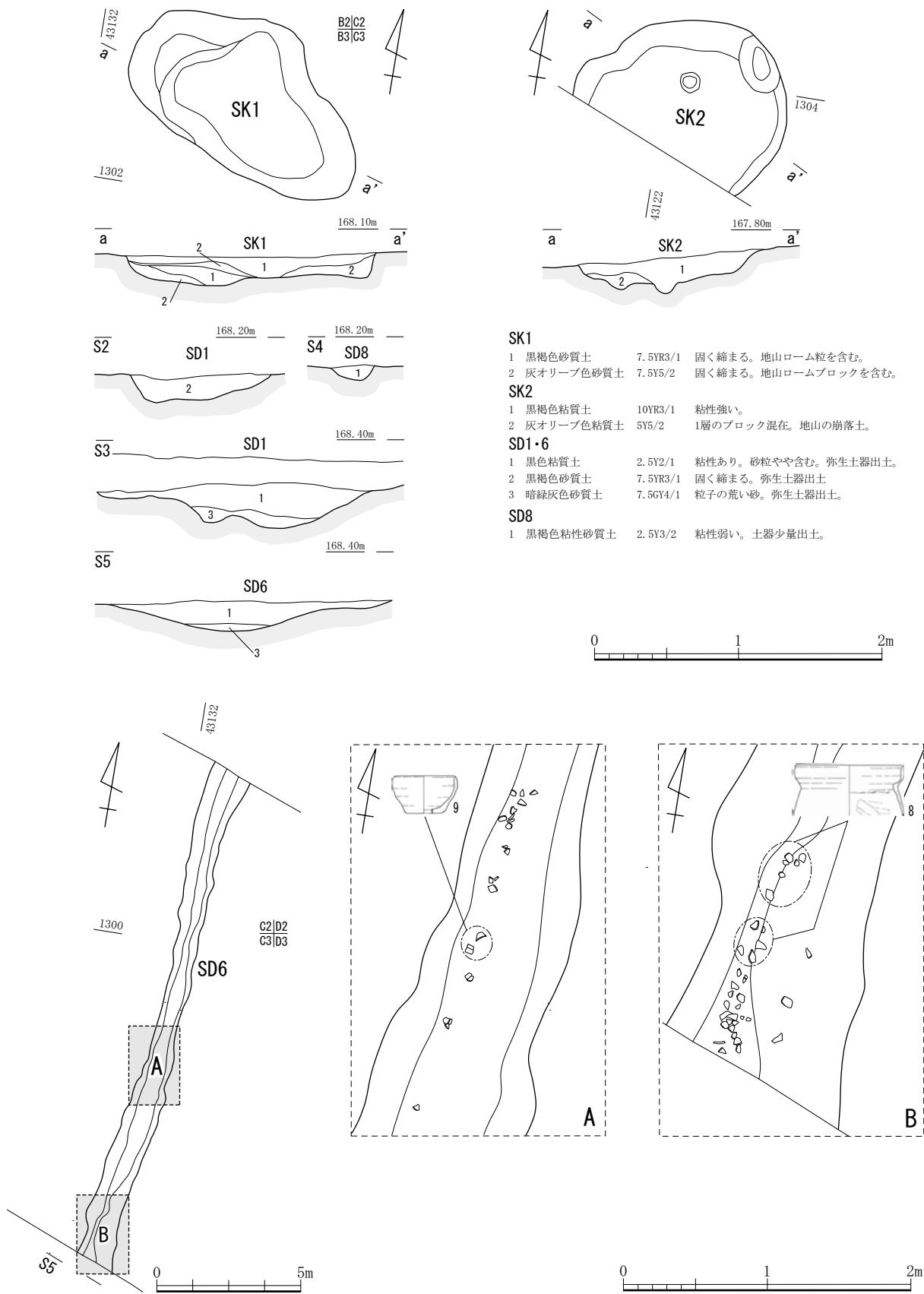
溝(第6・7図)

位置	挿図	規模(m)			時期	遺物	特徴
		上幅	下幅	深さ			
遺構	写真図版						
E3～E5	第6・7図	1.52	0.78	—	①以降	第11図1～6	弧状を呈す。底面直上に堆積していた砂層から、多くの小片が出土している。
SD1	—	0.08	0.28	—			
C2～C4	第7図	1.41	0.62	—	①以降	第11図7～12	SD1とおおよそ平行する。遺物出土状況もSD1と類似しており、同時期の遺構と考える。
SD6	図版第2(3)	0.10	0.30	—			
E3	第6・7図	0.61	0.16	—	②	須恵器片 磁器片	掘削深度が浅く、現在の水田区画に平行する。近世の磁器が出土しているため。それ以降に埋没したと考える。また、SD2・3～5・7と直交または並行するため、それらの遺構と同時期と考える。
SD8	—	0.03	0.09	—			

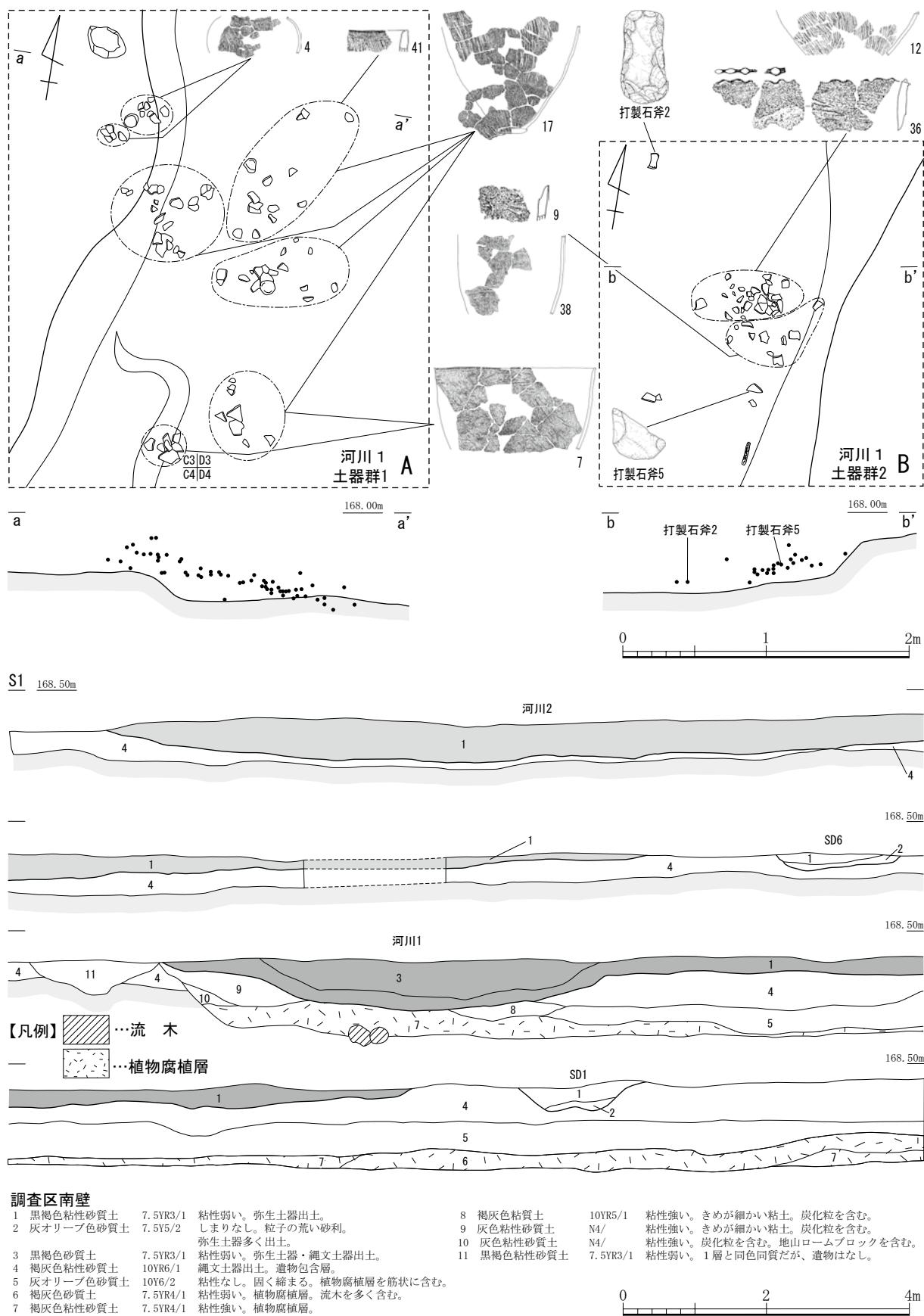
河川(第8図)

位置	挿図	規模(m)			時期	遺物	特徴
		上幅	下幅	深さ			
遺構	写真図版						
位置: C2～4・D2～4	—	16.60	15.72	—	①以降	第9図1～4・6・7・9～12、 第10図14・16・17～23・ 30・35～42・44・45、 第11図13、 第12図5・8・10、 第13図12・14～17・19	河川両岸付近からまとまって土器・石器(X001・004・006・007)が出土している。縄文土器を多く含むが、包含層を開析した際に流れ込んだものと考える。現在の赤根川は北流するため、本河川の流れも同様であったことを想定する。底面下は植物腐植層である。
河川1	第6・8図 図版第2(4) 図版第3(1)～(4)	—	—	0.65			
位置: A2・3・B1～3	—	11.80	7.60	—	①以降	第10図13・24・26・32、 第12図1・3・4・7・9、 第13図18	河川1と異なり、出土遺物は希薄であり、散在的である。図示したもの以外には、土器10数点が出土しているに過ぎない。底面下に植物腐植層は堆積していなかった。
河川2	第6・8図 図版第3(5) 図版第4(1)～(3)	—	—	0.42			

【凡例】①: 弥生時代後期末から古墳時代前期 ②: 近世以降
長径…長軸長 短径…短軸長 上幅…上端幅 下幅…下端幅



第7図 SK1・2、S2～5（縮尺1/40）、SD6 遺物出土状況（縮尺1/40、1/200）



第8図 河川1 遺物出土状況 (縮尺1/40)、S1 (縮尺1/80)

第4章 遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文時代後期～晩期、弥生時代中期～古墳時代前期の土器、石器である。遺物量は、土器が天箱5箱分、石器が2箱分が出土したが、微細片が多く、図化できた個体はわずかであった。遺物の詳細については第2～4表の観察表を付した。以下、概要を述べる。

第1節 土器

1. 縄文土器(図版第5 第9・10図 第2表)

時期は晩期後葉を主体とする。以下、文様の有無により大別して述べる。

有文土器(第9図1、第10図20～23)

沈線および隆帯によって主文様を描出する土器を該当させた。器種には鉢・浅鉢がある。出土量は極めて少ない。主要なものについては、ほぼ掲載した。以下、各個に説明する。

第9図1は浅鉢であり、口縁部がやや内屈する。口縁端部に面をもち、側端部にキザミを施す。口縁部全域がナデ状の凹線で上下端を区画した区画帯となり、その内部に陰刻文と2条一単位の沈線による三角形状文を3段配置する。1・2段目と2・4段目の三角形状文は上下対向し、その接続部は粘土貼付により突出する。1段目と3段目の陰刻文は区画凹線と連結する。口縁部の文様施文・調整の順序は区画凹線・粘土貼付→陰刻文→沈線文→全域でナデとなる。陰刻文の内部は粗雑なナデ、沈線文の内部は未調整である。体部には板状工具などによるナデを施す。体部上端には煤が部分的に付着する。第10図20は鉢の胴部上半である。ヘラ状工具による細沈線で三叉状文を描出する。沈線内部に赤彩痕が残る。同図21は浅鉢のやや内湾する口縁部である。多条の横走沈線を上下対向する小三角形状の陰刻文によって区切ることで菱形状文を描出し、上下交互に2段配置する。陰刻文の接続部は肥厚しない。同図22・23は浅鉢であり、直線的に開く口縁部の内面に隆帯文を貼付する。22は口縁端部に面をもつ。隆帯は断面三角形となる。内外面ともに研磨される。23は背の低い隆帯により連結三叉状文を描出する。

これらの時間的位置づけは、第10図20が晩期中葉の中屋式に、第9図1・第10図21～23が晩期後葉の「工字文系」土器に相当もしくは時間的に併行すると判断される。

無文土器(第9図2～12、第10図13～19・24～45)

器種には深鉢・壺・鉢・浅鉢がある。口縁部を中心に掲載した。以下、各器種において説明する。

深鉢(第9図7～12、第10図13・15・17・19・29～45)出土量の主体を占める。多くの個体の内外面には煤が付着する。器形には、口縁部が外傾または緩やかに外反する例(第9図7、第10図29・31・32)、口縁部がほぼ直立する例(第9図10、第10図30・34・35・39・40・43)、口頸部がやや内傾しながら立ち上がる例(第9図8・11、第10図36～38・42)、口縁部が外湾する例(第10図33)、口縁部が強く内湾する例(第10図44・45)がある。口縁端部の形態には、端面をもつ例(第9図7、第10図30～34・39・42)、丸味をもつ例(第10図40・41・43)、すぼまる例(第10図35・39・40・44)があり、口縁端部の施文には、指によるキザミ(第9図11、第10図36・37)、工具による押し引き(第9図10)がある。施文・調整には、縄文(第10図13)、最終調整がナデ(第9図7～9、第10図15・29～35)、最終調整が条痕(第9図10～12、第10図17・19・36～45)がある。ナデ調整のうち、条痕後ナデを施す例(第9図9、第10図35)がある。第9図7・9は浅い条痕状のナデであり、9は巻貝によるナデの可能性がある。第10図31は口頸部と胴部の境に強い横位ナデを施す。同図33は口頸部に指による強い横位ナデを施す。条痕調整例

のうち、横位ナデによる条痕磨り消し無文部を有する例があり、その部位には、口頸部(第9図11、第10図24～26)と口縁部・口唇部(第9図10、第10図39～41・43)がある。条痕原体には、卷貝(第9図10、第10図40など)と二枚貝(第9図11など)などが認められる。

壺(第9図2～4)2・3は同一個体である。口唇部が粘土貼付により肥厚し、端面が内面に向く。外面は摩滅するが、ナデもしくは研磨を施す。胴中央部に煤が部分的に付着する。4は球状に張り出す胴部である。頸胴部境に接合時の段をもち、段直上にヘラ状工具による周回沈線を施す。胴部には卷貝による粗いナデを施す。頸部に部分的に赤彩痕が残る。胴部下方の外面には煤が付着する。

鉢(第9図6、第10図24)第9図6は丸みをもつ胴部で、胴上部に指による押圧を施す突帯を貼付する。外面には丁寧なナデを施す。胴下部の外面には煤が部分的に付着する。第10図24は口縁部がわずかに外湾する。口縁内面に接合時の段をもつ。外面にはナデを施す。

浅鉢(第9図5、第10図25～28)第9図5、第10図25・26は体部上端で内屈し、口頸部が緩やかに外湾しながら立ち上がる器形を呈す。第9図5は体部であり、外面に研磨を施す。体部上方の外面には煤が付着する。第10図25・26は口縁部である。端部を丸く收め、口唇部にヘラ状工具による沈線を施す。25は幅が広く深いナデ状の沈線、26は細沈線である。26は口縁内面に2条の細沈線を施す。外面調整は25が摩滅のため不明であり、26が沈線施文後に研磨となる。第10図27・28は同一個体である。底部から直線的に開く器形を呈す。口縁端部はナデにより丸く收めるが、外側端部に粘土がはみ出す。外面にはナデの後研磨を施す。内面には工具によるナデ痕が深い沈線状に不規則に多数残る。

底部(第10図13～19)底部形態には、平底(13・14・16～19)・尖底(15)の他、内面からの粘土充填による厚底(第10図15・16・18)がある。底面調整には網代痕(13)、丁寧なナデ(16)、粗雑なナデ(14・15・17～19)がある。底面に小穴状の圧痕が認められる例(14～19)がある。圧痕は径3～10mm、深さ1～3mmを測る。調整前の圧痕であり、土器製作時の敷物痕の可能性がある。13は底面中央部がわずかに凹む。地文に縄文RLを施す。14は底部円盤の外縁にさらに粘土を貼付し底部とする。底側面も丁寧なナデを施しており、壺の可能性が高い。17・19は底部円盤の外縁が底側面に突出する。

小結 深鉢は大別すれば、外面の最終調整がナデ調整と条痕施文となる。両者はおおむね時間的前後関係にあり、前者は晩期中葉～後葉、後者は晩期後葉に位置づけられる。その他の器種はおおむね晩期中葉～後葉に所属すると判断される。なお、深鉢において地文縄文(第10図13)や肥厚口縁部(同図29)は器形や胎土も他とは異なることから、後期前半に属す可能性が高い。

第2表 縄文土器出土土地点一覧表

出土位置				出土位置				出土位置			
番号	地区	遺構	地点	番号	地区	遺構	地点	番号	地区	遺構	地点
第9図	1 D4	河川1		11 D2	河川1			26 A2	河川2		
	2 C3	河川1	3層	11 D3	河川1		3層	27 D2			1層
	3 C3	河川1	3層	12 D4	河川1	土器群2 No.2	3層	28 D4	包含層		4層
	3 D3	包含層	4層	13 B3	河川2		X013	29 D4	包含層		4層
	4 D4	包含層	4層	13 B3	河川2		1層	30 D3	河川1		1層
	4 C3	河川1	土器群1 No.1	14 D4	河川1		3層	31	南トレンチ		
	4 C3	河川1	土器群1 No.2	14 D4	包含層		4層	32 E3	SD1		3層
	4 D3	河川1	3層	15 D4	包含層		4層	32 B3	河川2		1層
	5 E4	包含層	4層	15 D4	包含層		4層	32 D4	包含層		4層
	6 C3	河川1	3層	16 D3	河川1		3層	33 E4	包含層		4層
第10図	7 C3	河川1	土器群1 No.3	16 D3	河川1		3層	34 D4	包含層		4層
	7 C3	河川1	土器群1 No.4	17 C3	河川1	土器群1 No.4	3層	35 E4	河川1		3層
	7 C3	河川1	3層	17 C3	河川1	土器群1 No.5	3層	36 D4	河川1	土器群2 No.2	3層
	7 D4	河川1	3層	17 C3	河川1	土器群1 No.6	3層	36 D4	河川1		3層
	8 D5	包含層	X015	17 C3	河川1	土器群1 No.7	3層	37 D4	河川1		3層
	8 E4	包含層	4層	18 D3	河川1		3層	38 D4	河川1	土器群2 No.3	3層
	9 C3	SD6		18 D3	河川1		3層	39 D4	河川1		3層
	9 D4	河川1	土器群2 No.3	19 D3	河川1		3層	40 D4	河川1		3層
	9 D3	河川1	3層	20 C4	河川1		3層	41 C3	河川1	土器群1 No.7	3層
	9 D5	河川1	3層	21 D2	河川1		3層	42 D3	河川1		3層
第10図	10 D3	河川1	3層	22 C3	河川1		3層	43 E4	包含層		7層
	10 D4	河川1	3層	23 D3	河川1		3層	44 D2	河川1		3層
	10 D3	包含層	7層	24 B3	河川2		1層	45 P2	河川1		3層
	10 D3	包含層	4層	25 D4	包含層		4層	45 D3	河川1		3層

第1節 土 器



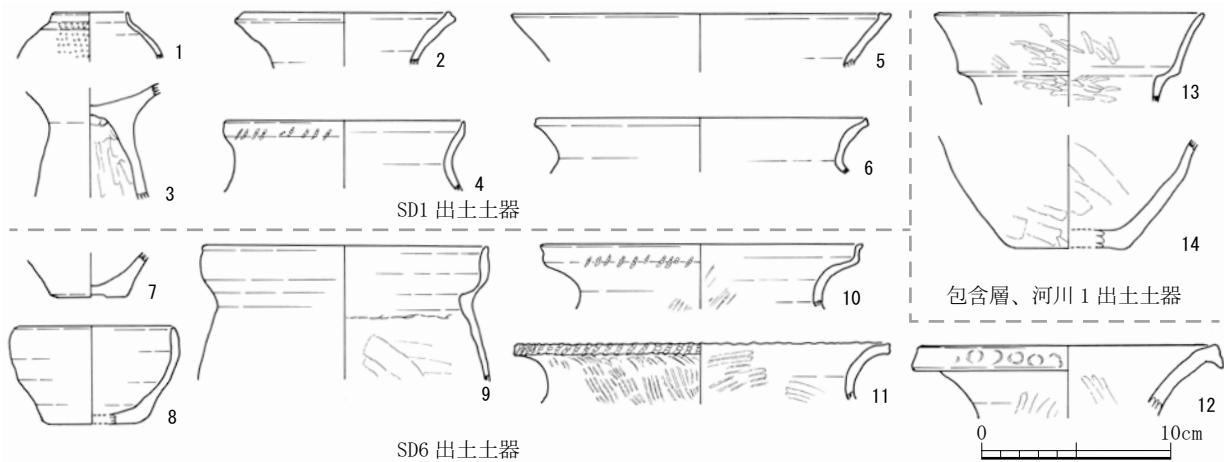
第9図 繩文土器（縮尺1/4）



第10図 繩文土器 (13～19 縮尺 1/4、20～45 縮尺 1/3)

2. 弥生～古墳時代の土器(図版第6 第11図 第3表)

1～6はSD1出土土器である。1・3・4は弥生時代後期末、漆町編年(以下、漆～群と略)4～6群の時期、2・5・6は古墳時代前期、漆7・8群の時期のものと考える(文4)。1は短頸の小型壺である。肩部に刺突文を充填している特徴は類例が少ない。2の壺は頸部が小さく、下膨れの胴部に窄まった底部をもつ扁球壺と考える。4の壺は頸部が緩やかにくびれ、口縁下端に櫛状工具による斜行列点文がめぐる。5の壺は鉢状の口端部の形状から布留系壺と考える。6の壺は頸部が明瞭に屈曲する。7～12はSD6出土土器である。7は漆4～6群、8～10・12は漆7・8群の時期に属し、11の壺は弥生時代中期のものである。8は手捏ねの小型鉢であり祭祀に使用される例が多い。10はS字状に短く屈曲する口縁をもつ近江系壺と考える。11の壺は、口端部に巻貝による斜行列点文を有し、胴部は二枚貝による条痕で調整している。12の壺は口縁部に円形竹管文が巡り、東海地方の影響がうかがわれる。



第11図 弥生～古墳時代の土器 (縮尺1/4)

第2節 石 器(図版第6 第12・13図 第4表)

1. 打製石斧(図版第6 第12図1～8)

打製石斧は8点検出し、1・2・6・7が完形品である。包含層と河川からの出土品である。石材は近接する赤根川でも採取可能な安山岩を主体としている。横枕遺跡の分類(文3)によるとA類:側辺がほぼ平行になり、いわゆる短冊形を呈するもの(1・2・4・5)、C類:基部から刃部にかけて直線的に拡がり、刃部が丸みを帯びるもの(3・7)、D類:側辺が抉入し、刃部にかけて拡がるもの(6・8)が認められる。最小限の加工で仕上げる製作技法が用いた1～7は弥生時代後期以降に属し、8は表裏全体を丁寧に調整していることから縄文時代のものと考える。

2. 砥 石(図版第6 第12図9)

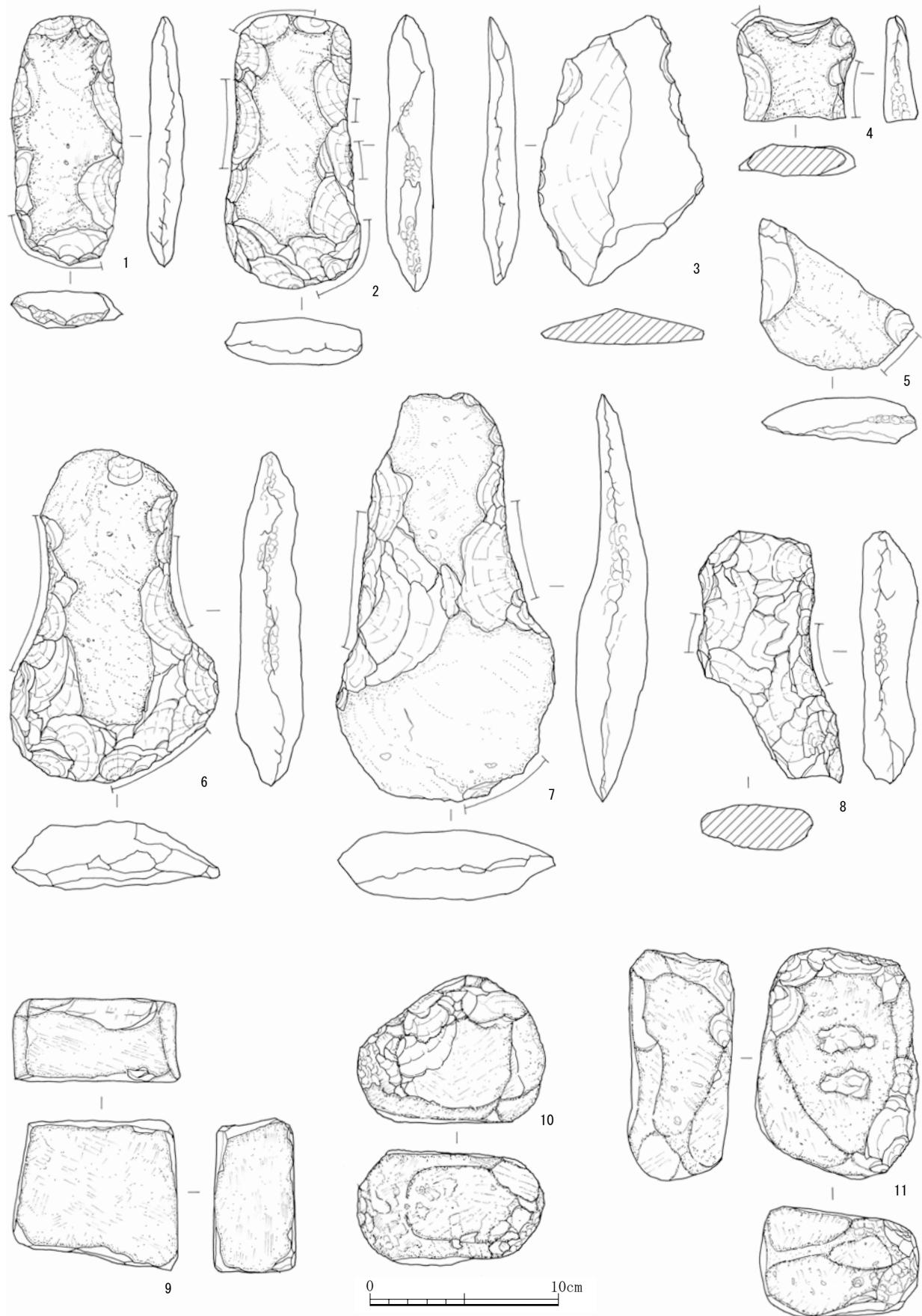
砥石は1点検出した。9は全面に砥面を有し、欠損品の再利用品と考える。側面は浅い凹面を呈す。

3. 磨 石(図版第6 第12図10・11 第13図12～17)

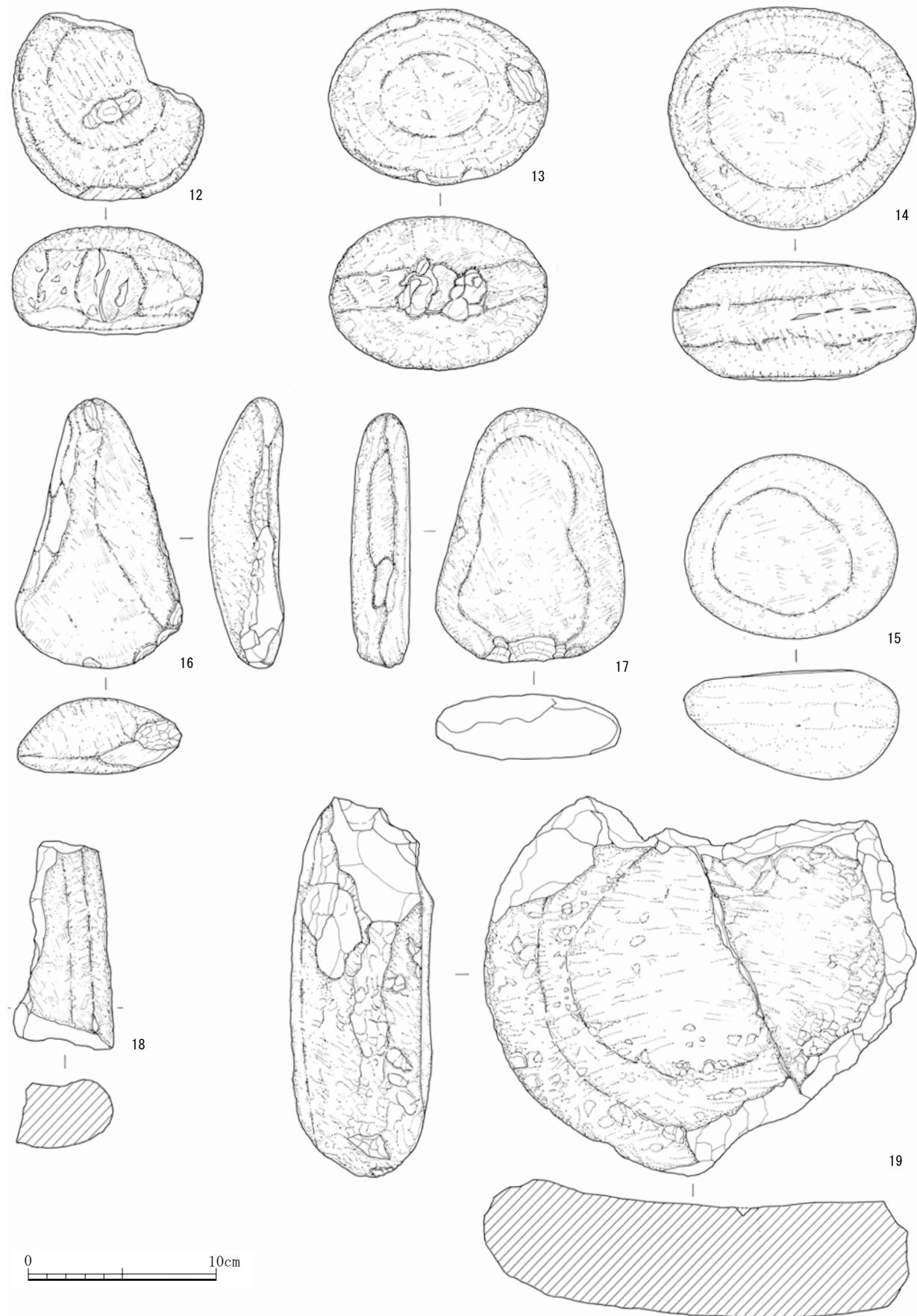
磨石は8点検出した。10は磨面を表裏／下面に有し、手にもつ上側面を敲打で潰して調整している。11は表に2つの凹み、下面に3つ磨面をもつ。手にもつ上側面は敲打で潰している。12～15は円礫を利用しており12・13は下側面に使用による敲打面をもつ。12・14の表裏と15の表は平滑な磨面をもつ。16・17は表裏自然面だが側面に磨面や敲打をもつ。打製石斧の未成品の可能性もある。

4. 石 皿(図版第6 第13図18・19)

石皿18・19は扁平な円礫を用い、周囲に縁をもつ。19はX006、X007の接合品である。



第12図 打製石斧、砥石、磨石（縮尺 1/3）



第13図 研石、石皿 (縮尺 1/3)

第3表 弥生～古墳時代の土器観察表

単位cm

No.	器種	法量	胎土 残存	形状・模様	調整	出土地点 時期	No.	器種	法量	胎土 残存	形状・模様	調整	出土地点 時期		
1	弥生 土器 小型壺	口: 高: 底: 焼: 色:	4.0 — — 良好 橙褐色	極砂粒 軟質 1/10以下	口縁部は斜めに短く内傾して立ち上がり、口端部は丸く收める。肩部は張り、弱い凹線が1条巡る。肩部全体に刺突文を施す。	外: 口縁部はヨコナデ。胴部はナデ。内: ナデ	E3/SD1 弥生時代 後期	8	土師器 小型鉢	口: 高: 底: 焼: 色:	8.6 5.3 5.4 良好 淡灰褐色	微砂粒 若干 軟質 1/2	口縁部は椀状に内湾して外方へ立ち上がる。口端部は丸く收める。底部は平坦。手捏ね成形。	外: 口縁部ナデ 内: ナデ	C4/SD6 No3・4 古墳時代 前期
2	土師器 壺	口: 高: 底: 焼: 色:	12.0 — — 良好 黄褐色	微砂粒 軟質 1/10以下	口縁部は斜め外方へ立ち上がり、口端部は浅く凹む。頸部径が小さい。下膨れ気味の形状をとる扁球壺の口縁部と考える。	外: 口縁部はナデ。内: ナデ	E4/SD1 古墳時代 前期	9	弥生 土器 甕	口: 高: 底: 焼: 色:	15.0 — — 良好 橙褐色	微砂粒 多量 白色粒子 軟質 1/10以下	口縁部は頸部で短く屈曲し、内湾気味に短く上方へ立ち上がる。口端部は先端を弱く屈曲して丸く收める。	外: 口縁部ヨコナデ 内: ヨコナデ 上位ナデ 弥生時代 後期	C3/SD6 No5 弥生時代 後期
3	弥生 土器 高杯	口: 高: 底: 焼: 色:	— — — 良好 淡褐色	極砂粒 軟質 1/10以下	高杯の脚部。脚柱部はわずかに膨らみをもち、脚裾は大きく外方へ延びる器形と考える。	外: 脚部ナデ 内: 脚部シボ リ痕 受部はナデ。	E4/SD1 古墳時代 前期	10	弥生 土器 甕	口: 高: 底: 焼: 色:	17.0 — — 良好 淡黄褐色	砂粒 若干 堅緻 1/10以下	口縁部は強く外反した後、短くS字状に上方へ立ち上がる。口端部は水平な端面を持つ。近江系甕。口端部下端に斜行列点文が巡る。	外: 口縁部ヨコナデ 内: 口縁部 頸部ヨコナデ 胸部ハケス付着	C3/SD6 No6 弥生時代 後期
4	弥生 土器 小型甕	口: 高: 底: 焼: 色:	16.0 — — 良好 橙色	微砂粒 軟質 1/10以下	口縁部は弱く外反した後、口縁部が垂直に短く立ち上がる。口縁部下端には斜行列点文が巡る。胴部は球状に膨らむと考える。	外: 口縁部ヨコナデ 内: 口縁部～ 頸部はナデ 頸部下半ハケ	E4/SD1 弥生時代 後期	11	弥生 土器 甕	口: 高: 底: 焼: 色:	20.0 — — 良好 淡赤橙色	小砂粒 多量 軟質 1/10以下	口縁部は強く外反し、口端部を面取りして外方へ向ける。口端部端面に巻貝原体の斜行列点文を施す。口縁部上位にスス付着。	外: 口縁部は二枚貝の貝殻 条痕 内: 口縁部は二枚貝の貝殻 条痕	C2/SD6 弥生時代 中期
5	土師器 甕	口: 高: 底: 焼: 色:	20.0 — — 不良 橙褐色	微砂粒 白色粒子 多く含む 軟質 1/10以下	口縁部は斜め外方へ短く立ち上がり、口端部は水平な平坦面をもち、内側は厚みをもつて鋸状に弱く突出する。布留系甕と考える。	外: 口縁部ナデ 内: ナデ	E5/SD1 古墳時代 前期	12	弥生 土器 壺	口: 高: 底: 焼: 色:	15.7 — — 良好 灰黄褐色	極砂粒 堅緻 1/10以下	口縁部は緩やかに斜め外方へ立ち上がり、口端部外側に粘土紐を付け口縁帶を設けている。口縁帶に径7mmの鋸い円形スタンプ文が巡る。	外: 口縁部上位ナデ 下位ハケ 内: 口縁部上位ナデ	C2/SD6 弥生時代 後期
6	土師器 甕	口: 高: 底: 焼: 色:	17.7 — — 良好 橙褐色	微砂粒 多量 軟質 1/10以下	口縁部は短く外反し、口端部は平坦に面取りする。口唇部上端は弱く上方へ摘み出す。	外: 口縁部 強いヨコナデ 内: ヨコナデ	E4.5/SD1 古墳時代 前期	13	弥生 土器 鉢	口: 高: 底: 焼: 色:	14.0 — — 良好 淡灰褐色	極砂粒 堅緻 1/10以下	口縁部は斜め外方に立ち上がる。頸部は短く屈曲して半球形の胴部をもつ。全体的にシャープな仕上げ。	外: 口縁部～ 胸部ミガキ 内: 口縁部から 胸部ミガキ	D3/河川1 弥生時代 後期
7	弥生 土器 甕	口: 高: 底: 焼: 色:	— — — 不良 橙褐色	微砂粒 多量 軟質 1/10以下	弥生時代中期の甕の底部。外面中央が径1.8cm凹む。ある段階で穿孔を意識していたと考える。	外: ナデ 内: ハケ	C3/SD6 弥生時代 中期	14	弥生 土器 甕	口: 高: 底: 焼: 色:	— — 6.0 良好 淡灰褐色	小砂粒 多量 軟質 1/10以下	底部は平坦で斜め外方へやや内湾しながら立ち上がる。	外: 底部下半 はハラケズリ 以上はナデ 内: 底部ハラ ケズリ	E3/包含層 弥生時代 後期

第4表 石器観察表

打製石斧 (図版第5 第12図)

単位cm 重量g

No.	法量			分類	残存	石材	側刃潰し	磨滅部位	出土地点	備考	
	長さ	幅	厚さ								
1	13.2	5.7	1.9	200	A	1/1	安山岩	—	左刃部～中央/裏面	A3	/河川2 1層 灰緑色 表/自然面 裏/剥離面
2	14.6	7.2	2.4	400	A	1/1	安山岩	左右側刃・基部	右刃部/裏	D4	/包含層 X002 暗灰色 表裏に自然面
3	14.3	8.7	1.9	230	C	1/1	ホルンフェルス	—	—	B2	/河川2 X009 暗灰色 基部・右刃部欠損
4	5.5	6.2	1.8	80	A	1/3	斑晶質安山岩	右側刃・基部	—	B3	/河川2 1層 淡灰緑色 刃部欠
5	8.0	8.2	2.3	140	A	1/4	閃綠岩	—	右刃部/表	D4	/河川1 土器群2 白色 表/自然面 裏/剥離面
6	17.6	10.9	3.5	660	D	1/1	安山岩	両側刃	右刃部/表	D4	/包含層 X003 灰緑色 表裏/自然面
7	21.7	11.5	3.8	840	C	1/1	斑晶質安山岩	両側刃	左右刃部角/裏	D4	/河川2 1層 X008 灰緑色 表/自然面 裏/剥離面
8	13.5	7.7	3.0	330	D	3/4	安山岩	両側刃中央	—	C3	/河川1 3層 淡灰色 表裏/調整面 刃部欠

砥石、磨石、石皿 (図版第5 第12・13図)

単位cm 重量g

No.	種類	法量				石材	出土地点	備考		
		長さ	幅	厚さ	重量			残存		
9	砥石	7.8	8.6	4.3	590	1/1	安山岩	A2	/河川2 X012	淡黄褐色 表裏・全側面/砥面
10	磨石	10.1	7.9	5.9	690	1/1	石英閃綠岩	D3	/河川1 3層	白色 表裏・上下/磨面 左右・上/敲打面
11	磨石	12.3	8.5	5.8	970	1/1	安山岩	D3	/包含層 7層	淡灰色 表裏・自然面 左右・下/磨面 上/敲打面
12	磨石	9.8	10.0	5.7	795	2/3	デイサイト	D3	/河川1 3層	白色 表裏・凹み・磨面 下/磨面 上/欠損
13	磨石	11.6	9.3	8.0	1,070	1/1	砂岩	D3	/包含層 7層	明灰色 表裏・自然面 下/磨面 左右/敲打面
14	磨石	13.0	11.8	6.4	1,460	1/1	安山岩	D4	/河川1 X004	灰白色 表裏/磨面 全周/敲打面
15	磨石	11.3	9.9	5.9	830	1/1	緑色岩	D3	/河川1 3層	暗灰色 表/磨面
16	磨石	14.3	8.8	4.0	555	1/1	緑色岩	C3	/河川1 3層	暗灰色 表裏/自然面 左/磨面 右・右角/敲打面
17	磨石	13.5	10.0	3.2	580	1/2	デイサイト	D4	/河川1 X001	淡灰褐色 表裏/自然面 左/磨面 右中央/敲打面
18	石皿	11.0	5.3	3.4	320	1/8	砂岩	A3	/河川2 X010	暗灰色 表/擦面 裏/自然面 側面/敲打面
19	石皿	22.7	20.2	5.7	4,120	1/5	デイサイト	D4	/河川1 X006/X007	暗灰色 表/擦面 裏/自然面 側面/敲打面

第5章 まとめ

今回の調査では、土坑2基、溝2条、河川2条を中心とする遺構を検出した。主な出土遺物は、縄文土器、弥生時代中期から古墳時代前期の土器である。出土した土器が少なく明確にできなかつたが、遺構の時期については、SK1・2が弥生時代後期末以前、河川2条、SD1・6が古墳時代前期以降と位置付けた。

平成5年度の調査成果と比較すると、土器様相は類似し、遺構も土坑、溝、河川が主体となる点で共通するが、建物の存在を示す柱穴は確認できなかつた。

犬山遺跡の範囲と遺構 平成5年度調査は、調査区幅は1.8～5.7mと狭いが、総延長約580mに渡つて実施し、犬山遺跡の包蔵地範囲を縦断、横断する形となつてゐる。そのため、遺跡範囲を捉えることが可能である。まず、全体的に赤根川から離れるほど遺構が希薄になる状況が想定でき、赤根川に最も近い箇所に設定した2トレンチ(第1図)では、居住域は確認できないが、完形に近い弥生土器や土師器を含む多量の土器が出土していることから、集落中心域に近接していると考える。

また、2トレンチでは、今回の調査では確認できなかつた中世の掘立柱建物1棟を検出しているが、遺構・遺物ともに密度は薄い。本遺跡周辺の遺跡では、低位段丘面に位置している太田・小矢戸遺跡や下丁遺跡で、比較的多くの土師質土器、陶器、貿易陶磁が確認され、和鏡も出土している。下丁遺跡では、古代から中世にかけて、総柱建物を含む掘立柱建物が多数確認され、太田・小矢戸遺跡では屋敷地が確認されており、有力者層が居住していたと想定されている。中世では、低地で遺構や遺物の密度が薄く、段丘上の遺跡で遺構密度が濃い傾向にある。いずれにせよ犬山遺跡の中心域は、赤根川に沿つた現在の犬山集落と重なつてゐると思われる。

弥生～古墳時代の土器について 大野盆地の弥生時代中期から古墳時代前期に属する遺跡の分布をみると、尾永見、中丁、下丁、太田・小矢戸、下黒谷の各遺跡が赤根川左岸域に展開し、上舌、右近次郎西川遺跡が右岸に所在する。一方で真名川左岸に位置する横枕遺跡では、弥生時代後期末の堅穴建物が1軒確認されているが、その他に遺構は確認されておらず、弥生時代から古墳時代前期の遺構分布は希薄と言わざるを得ない。現時点では、弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡は、赤根川流域に色濃く分布する傾向にあり、東部域では目立たない。

今回の調査で出土した土器は、小片が多く、良好な資料は得られなかつた。土器が出土した遺構も河川と溝に限られ、層位的に変遷を追うことは困難である。よつて他遺跡の土器との比較を通じて、犬山遺跡の弥生時代中期から古墳時代前期の土器様相を概観する。

まず、弥生時代中期の土器は、口縁端部に刻みをもつ条痕文系の甕(11)など数点出土するのみであり、出土量はごくわずかであった。

弥生時代後期末から古墳時代前期(漆4～8群)には、有段口縁(9)の甕のほかに、受口状口縁をもつ甕(4・10)、口縁部に円形の竹管文をもつ壺(12)など近江や東海系の土器を一定量含むことが確認できる。また、古墳時代前期には、いわゆる布留系甕(5)や単口縁の「くの字」形甕(6)が出土しており、北陸地方の特徴が次第に薄れていく状況が認められる。

しかし、同じ大野市域でも土器様相は一様ではなく、尾永見遺跡では外来系の土器をあまり含まない。下黒谷遺跡では、東海系の土器も一定量確認できるが、それに比べて在地の月影式の甕が顕著に

出土する傾向にある。つまり大野盆地の中でも、外来系土器の影響の濃淡、在地土器の多寡が認められる。その要因は不明だが、遺跡の性格、構成する集団の差異なども反映している可能性があり、大野市域の集落の位置付けを行う際に重要な視点となろう。

また、大野盆地の土器は「白っぽい胎土」で作られているという指摘があり(文5)、今回の大山遺跡の調査でも同様な胎土をもつ土器が確認でき、2・4・8・12・13が該当する。土器の内外面がやや褐色味を帯びる白色を呈し、断面中央が黒色をなすサンドイッチ状の焼成を呈し、均一に焼かれていないものが多い。胎土には、径1mm以下の黒色砂粒を含むことが特徴である。上述した通り、4が近江系、12が東海系だと考えると、他地域の影響を受けた土器を盆地内で作っていると想定でき、2は古墳時代前期に位置付けられることから、同様な胎土で継続して土器を製作していたと考える。また、典型的な器形ではないが、9の月影式の甕は淡橙色を呈し、福井・坂井平野で普遍的にみられる胎土と類似し、古墳時代前期の布留系の甕は、砂粒を多く含む粗雑なつくりで前2者の胎土とも異なる。福井県内の様々な地域から土器が搬入されている状況が伺える。平野部の遺跡との関係や東海や近江地域などの他地域との交流ルートはどのようにであったか、今後の資料の蓄積を期待したい。

縄文土器について 今回の調査では、河川や下層の遺物包含層から縄文時代後期から晩期の土器が出土した。周辺の遺跡では、縄境遺跡で晩期後葉から最終末に位置付けられる比較的まとまった資料が出でている。その他に右近次郎西川遺跡や下黒谷遺跡でも同時期の資料が確認できるが、晩期の土器は概して出土量が少ない。

嶺北地方全体では、勝山市大島田遺跡、永平寺町金合丸・成仏・木原町遺跡、藤巻館遺跡、福井市糞置遺跡などで比較的まとまって資料が得られているが、系統の整理や空間的把握までに至らず、解明すべき今後の課題である。

参考文献

1. 石黒立人・加納俊介編『弥生土器の様式と編年』東海編 木耳社 2002年
2. 佐藤由紀男編『弥生土器 考古調査ハンドブック12』ニューサイエンス社 2015年
3. 鈴木篤英「第5節 石器、石製品」「横枕遺跡－一般国道157号道路改良工事に伴う調査－」福井県埋蔵文化財調査報告第148集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2014年
4. 田嶋明人「考察－漆町遺跡出土土器の編年－」「漆町遺跡I」石川県立埋蔵文化財センター 1986年
5. 堀 大介「大野盆地における古墳成立期の土器編年」「中丁遺跡－担い手育成基盤整備事業に伴う調査－」福井県埋蔵文化財調査報告第64集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003年
6. 堀 大介「月影式の成立と終焉」「古墳出現期の土師器と実年代」(財)大阪府文化財センター 2003年
7. 堀 大介「越前・加賀地域」「古式土師器の年代学」大阪府埋蔵文化財センター 2006年
8. 豆谷和之「付章 大島田遺跡出土土器の編年検討」「大島田遺跡 北陸製薬株式会社工場等建設に伴う緊急発掘調査報告書」勝山市埋蔵文化財調査報告第9集 勝山市教育委員会 1991年
9. 豆谷和之「糞置式土器について」『文化財学論集』文化財学論集刊行会 1994年
10. 山本孝一「第3節 弥生時代前期～中期土器群の検討」「坂井兵庫地区遺跡群II(遺物編)－県営担い手育成基盤整備事業に伴う調査－」福井県埋蔵文化財調査報告第81集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2005年
11. 山本孝一「付章 糞置遺跡の縄文土器・弥生土器の検討」「糞置遺跡－県営圃場整備事業担い手育成型(区画整理)半田地区に伴う調査－」福井県埋蔵文化財調査報告第90集 2006年

写 真 図 版



(1) 遺跡遠景（北西から）



(2) 遺跡近景（南東から）

図版第二
遺構



(1) SK1 (南から)



(2) SK2 (北から)

(3) SD6 遺物出土状況 (南から)



(4) 河川 1 (南から)

図版第三 遺構



(1) 河川 1 遺物出土状況 土器群 1 (北西から)



(2) 河川 1 遺物出土状況 土器群 2 (南西から)



(3) 河川 1 内 X003(打製石斧 6)、X004(磨石14) (西から)



(4) 河川 1 内 X006・007(石皿19) (東から)



(5) 河川 2 (南から)

図版第四
遺構



(1) 河川 2 内 X013 (縄文土器13) (西から)



(2) 河川 2 内 X008 (打製石斧 7) (東から)



(3) 河川 2 内 X012 (砥石 9) (東から)

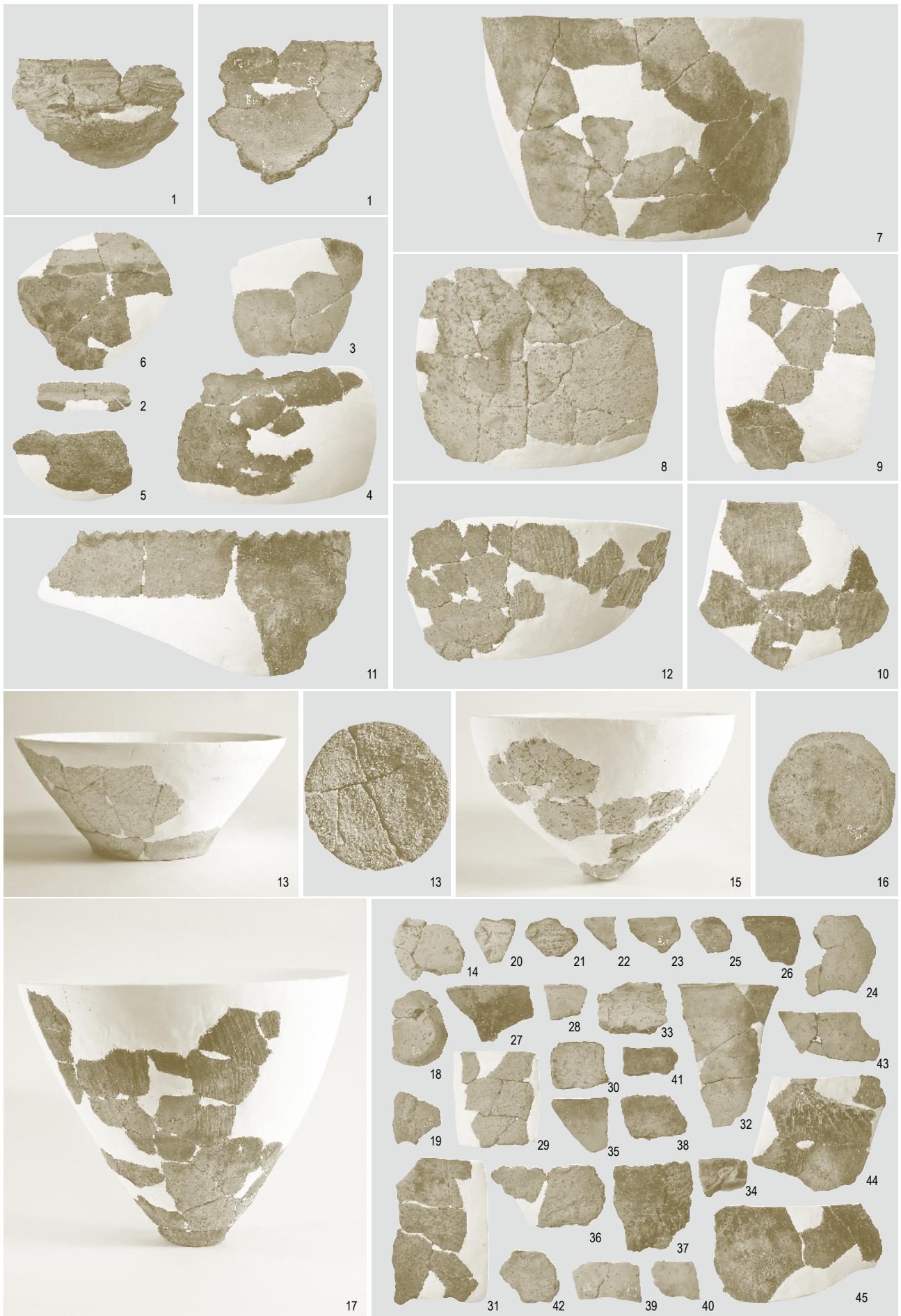


(4) 包含層 4 層内 X015 (縄文土器8) (西から)



(5) 包含層 4 層除去後 (東から)

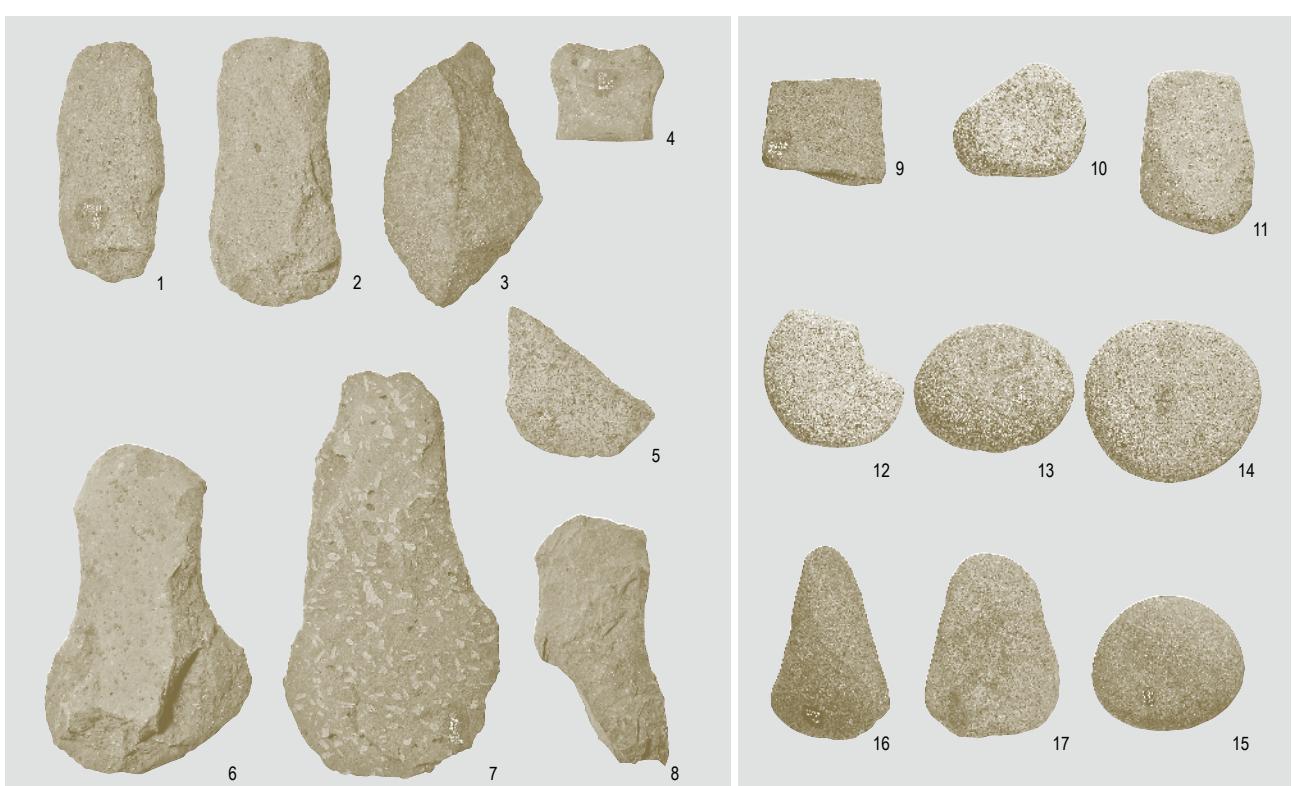
図版第五 遺物 繩文土器



図版第六 遺物 弥生～古墳時代の土器 石器

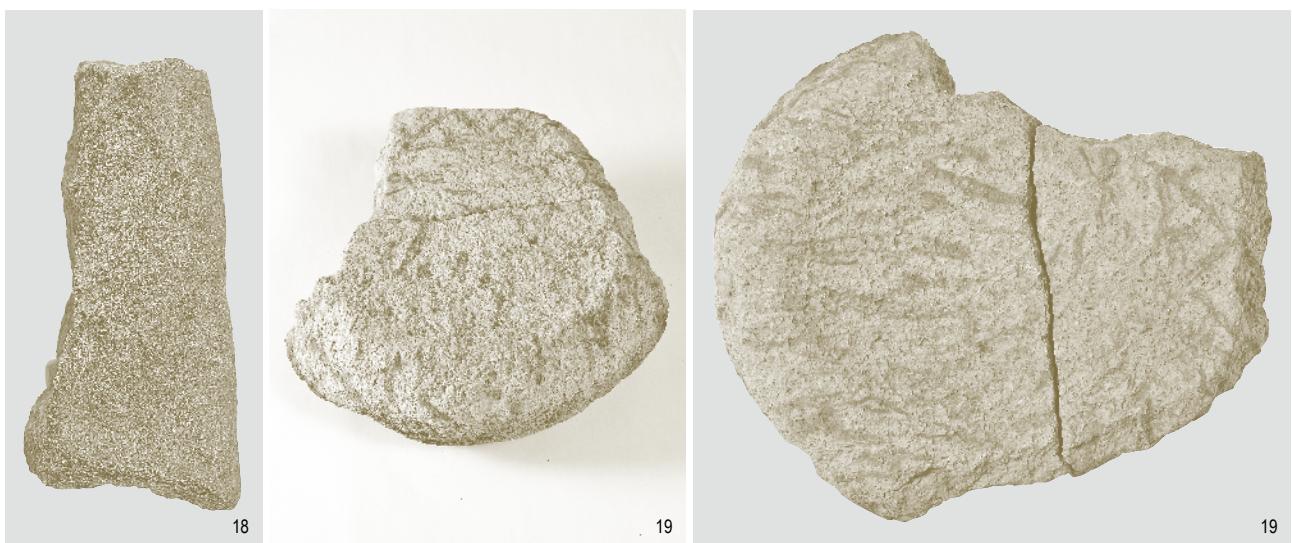


(1) 弥生、古墳時代の土器 SD1 出土土器 (1～6) SD6 出土土器 (7～13) 河川 1 出土土器 (13)



(2) 打製石斧 (1～8)

(3) 砥石、磨石 (9～17)



(4) 石皿 (18・19)

報 告 書 抄 錄

福井県埋蔵文化財調査報告 第169集

犬山遺跡

—一般国道476号道路改良事業に伴う調査—

平成30年7月17日 印刷

平成30年7月20日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷 株式会社リンクコーポレーション
〒910-0017 福井市文京1丁目18-15
